

# 下府廃寺跡発掘調査概報

## —市内遺跡発掘調査—

平成2年3月

浜田市教育委員会



塔心礎

## 序

国府地区は、多くの重要な文化財を有し、古くから石見の文化の中心地であります。その上で上府地区は、国庁が置かれていたと推測され謎の部分が多いところであります。

今回の下府廃寺跡の発掘調査は、国分寺より古く相当大きな寺であると言われている寺跡の調査であり、この調査如何によっては国庁の解明につながるかもしれないというものです。この報告書は、今年度から三ヶ年計画の初年度に当たる調査の報告書であります。

今回の発掘調査が円滑かつ無事目的を達成できましたことはひとえに島根大学教授田中義昭先生、島根県文化財保護指導員の桑原韶一先生・的場幸雄先生、島根県教育委員会文化課のご指導ご援助のたまものであります。また、調査に御理解と御協力を頂いた浜田市上府下府町の関係者の皆様方に心から感謝申し上げる次第であります。

平成2年3月

浜田市教育委員会

教育長 古原忠雄



## 目 次

Iはじめに .....	1
1. 調査による経緯 .....	1
2. 調査体制 .....	1
II位置と歴史的環境 .....	2
III調査の概要 .....	5
IV出土遺物について .....	12
Vまとめ .....	16

## 例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成元年度に国庫・県費の補助を得て実施した市内遺跡発掘調査の調査概要報告である。
2. 本調査は市内遺跡として開発の問題を抱えている下府廃寺跡の調査を実施している。
3. 調査を実施するにあたって、地権者の小寺武三、佐々木定実、佐々木謙、吉本悦子各氏並びに小寺義一氏をはじめ地元下府地区の方々にご協力いただいた。
4. 調査については宮本徳昭（島根県文化財保護指導員）、鈴木久男（京都市埋蔵文化財研究所）の各氏にご助言をいただいている。
5. 地形測量にあたっては3等基準点設置のため石見測量設計株式会社に委託した。基準点設置にあたって長橋利明氏にご協力いただいた。
6. 本書の作成にあたっては宮本徳昭、内田律雄（島根県文化課）、林健亮（同）、大谷晃二（岡山大学大学院研究生）、中田洋子、山本博、斗光秀基の各氏にご協力いただいた。
7. 本書の編集、執筆は原裕司がおこなった。

# I はじめに

## 1. 調査に至る経緯

下府廃寺跡は島根県浜田市下府町に位置し、那賀郡金城町を源とする二級河川下府川の沖積平野北側の微高地に立地する。周辺からは瓦片が採集され、伽藍としては塔跡が残されている。昭和12年6月15日に国の史跡指定がなされたが、その範囲は塔心礎部分のみであり、また、調査は今日に至るまで実施されず、その詳細は明らかではなかった。

下府廃寺跡周辺は、昭和48年に浜田市告示11号によって第2種住居専用地域として用途地域が指定され、塔跡の西側約40mの位置には住宅が建ち並び、また、今回新たに住宅建設の計画も持ち上がっている。さらに、広島と結ぶ中国横断自動車道、国道9号線バイパスと交通網の整備が進み開発条件が整いつつある。すでに、第3セクターによるリゾート開発計画が掲示されるなど、開発の波が押しよせている。

下府川下流域の沖積平野は国府や国分寺が所在する古代石見国の中心地であるにもかかわらず、石見国府がまだ明らかとなっていないなど埋蔵文化財の把握が不十分であり、その対応は急務となっている。そのため、差し迫った開発を抱える下府廃寺跡について遺存状況の確認及び寺域確認を目的とした3ヶ年計画を立て、発掘調査を実施した。なお、今回の調査面積は134㎡である。

## 2. 調査体制

調査は次の体制で実施した。

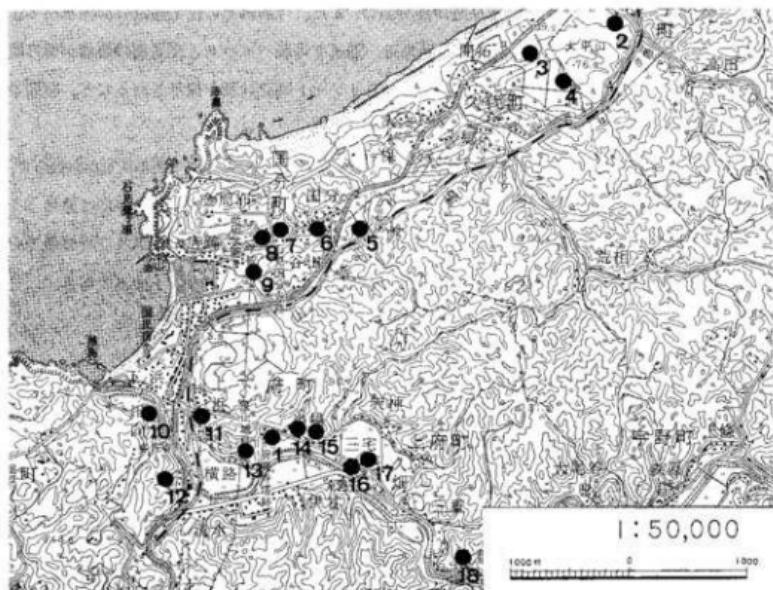
調査期間 平成2年1月18日～3月5日

調査主体	浜田市教育委員会 教育長 半田 浩～古原忠雄
調査指導	田中義昭（島根大学法文学部教授）
	島根県教育委員会文化課
調査担当者	桑原詔一（島根県文化財保護指導委員）
調査員	的場幸雄（島根県文化財保護指導委員）
	原 格司（嘱託職員）
遺物整理員	榎木庸子（臨時職員）
事務局	浜田市教育委員会社会教育課 社会教育課長 飯泉清次 社会教育係長 宅間雅照 主事 斗光秀基

## II 位置と歴史的環境

下府廃寺跡は、島根県浜田市下府町632番地4外に所在し、古代石見国と呼ばれた島根県西部のほぼ中央に位置する。石見国は中国山地から派生する山々が海までせまり、大小の河川は急峻な山々を縫うように北西方向に流れ日本海に注ぐ。その途中でわずかばかりの河岸段丘を形成させるとともに河口には沖積平野を形成する。下府廃寺跡の所在する下府川下流域も河口から約3.3 km、幅約500 mの蛇行した沖積平野が広がり、海岸は偽砂丘が発達している。

下府廃寺跡は沖積平野北側の丘陵山麓に形成された微高地上に立地する。丘陵の尾根は北東から



第1図 周辺遺跡位置図

1. 下府廃寺跡 2. 大平山遺跡群・波子遺跡 3. 大平山遺跡群・大平浜遺跡
4. 大平山遺跡群・越峰遺跡 5. 泰古田窯跡 6. 石見国分尼寺跡
7. 石見国分寺跡 8. 石見国分寺瓦窯跡 9. 浜田ろう学校敷地古墳
10. 川向遺跡 11. 伊賀神社跡遺跡 12. 中ノ古墳 13. 笹山城跡
14. 平場口古墳群 15. 片山古墳 16. 宮宅山遺跡 17. 上府遺跡
18. 上条遺跡

南西へ延び、尾根の先端部分は三方へ分岐して広がり、笹山と呼ばれている。標高は45～70m、微高地との比高差約40mの急峻な地形を呈している。現在、丘陵の尾根と笹山の間を市道下府・上府線が切り通している。微高地は北側の尾根と西側の笹山によって二方向が囲まれる格好となり、標高は約14mで南側へ緩やかに傾斜して、標高約7mの水田に至る。北側の尾根寄りには塔跡と礎石1個が残されている。

この下府川下流域の沖積平野は国府や国分寺が所在する石見国の中心地であるが、遺跡確認数が少なく、研究は大きく立ち後れている。国府についても幾つか候補地が上げられ、昭和52年度～<sup>(1)</sup>昭和54年度にかけて下府町横道地区、伊甘神社<sup>(2)</sup>遺跡、上府町三宅地区で試掘調査が実施されたが所在地を確認するまでには至っていない。以下、主な遺跡について触れておく。なお、現在までのところ、この流域で先土器・縄文時代の遺跡は知られていない。

10. 川向遺跡 下府川河口に近い自然堤防上に立地する複合遺跡である。広範囲にわたって遺物が採集され、弥生時代中期～終末の土器及び須恵器や土師質土器、環状石斧等がある。

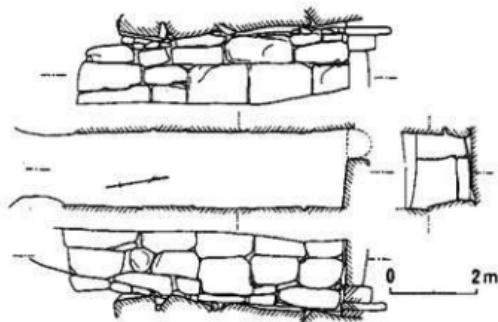
11. 伊甘神社<sup>(3)</sup>遺跡 下府川左岸、川向遺跡の東南に位置する複合遺跡である。昭和53年に石見国府推定地調査に伴って調査が実施された。遺構としては占墳時代中期の祭祀土壤が確認されているほか、ピット群が認められている。遺物は弥生時代中期～奈良時代のもので、なかには瓦が含まれている。瓦は同分寺跡出土と同類のものと、下府廐寺跡出土と同類のものが出土している。なお、伊甘神社は式内社であるが本来別の地にあったとも伝えられている。

18. 上条遺跡 沖積平野の最奥に位置する遺跡である。大正末に丘陵中腹を探土中偶然2個体分の銅鐸が発見されている。銅鐸はほぼ完形のものと上部を残す残欠であり、ともに扁平紐式の袈裟摩文銅鐸である。ほぼ完形のものは総高推定28cmである。

15. 片山古墳 沖積平野の北側丘陵中腹に位置する。西側約350mに下府廐寺跡が所在する。墳丘は墳形・規模とも判然としないが、丘陵側を切削した一辺11mの方墳と考えられる。石室は長さ6.2m、幅1.7m、高さ約1.5mの無袖型の横穴式石室をもち、腰石の一部に切石を使用している。

7. 石見國分寺跡 日本海を望む標高約50mの台地状の丘陵に立地する。現在浄土真宗松林山金蔵寺が所在する。昭和60年の現状変更を契機に3回に及ぶ調査が実施されているが、塔跡以外の伽藍については明らかとなっていない。塔跡は土壇状となり、周囲には原位置を保つ礎石が残っている。調査では塔の北側及び西側で地覆石にあたる磚列を確認している。なお、昭和63年度調査で7世紀後半の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。

6. 石見國分尼寺跡 國分寺跡から東側約350m離れた同丘陵上に位置する。現在曹洞宗東光山國分寺が所在し、礎石が転用されている。地名に「比丘尼所」「尼所」が残されている。調査が実施されておらず実態は明らかではない。なお、銅造誕生釈迦仏立像の出土が確認されている。



第2図 片山古墳石室実測図 (注2より)

8. 石見国分寺瓦窯跡<sup>(8)</sup> 国分寺跡から南西側約100m離れた同丘陵上に位置する。昭和41年農地改良事業によって発見された。工事によって焚口南側付近が失われたが、緊急調査が実施され県指定史跡として保存されている。窯の構造は半地下式の無状式平窯で、焼成室より60cm燃焼室を下げその間にU字形に掘りくぼめた段がある。窯の推定全長5m、焼成室の幅2.4mである。出土した軒平瓦は均整唐草文を配するものを窯の構築材として使用し、蓮華文を配するものを焼成していた。

5. 奈古田窯跡<sup>(9)</sup> 国分寺跡から東側約730m離れた同丘陵斜面に位置する須恵器窯である。私道造成中に発見されたもので、窯の中心部分は烟によって破壊されているものと考えられる。時期は7世紀から8世紀と考えられている。

#### 註

- (1) 島根県教育委員会『石見國府推定地調査報告Ⅰ』昭和53年
- (2) 島根県教育委員会『石見國府推定地調査報告Ⅱ』昭和54年
- (3) 島根県教育委員会『石見國府推定地調査報告Ⅲ』昭和55年
- (4) 前掲註2
- (5) 直信信夫『石見上府村発見銅鐸の出土状態』『考古学雑誌』22-2
- (6) 浜田市教育委員会『石見國分寺跡第Ⅰ期調査概報』平成元年
- (7) 大島幾太郎『那賀郡史』昭和15年
- (8) 島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ』昭和61年
- (9) 山本清監修『さんいん古代史の周辺』(下) 昭和55年

### III 調査の概要

下府庵寺跡については、昭和55年の石見国府推定地調査時に地形測量図が作成されているが、今回新たに3級基準点を設置して地形測量を実施した。地形測量は微高地部分を対象として2ヶ年で作成し、周辺部を含む地形図は航空測量によることにした。

調査は西側寺域を確認することを目的として11の調査区を設定した。遺構としては段状遺構及び小鐵冶跡を確認している。以下各調査区の概要を述べることにしたい。

#### 第1調査区

南北3m、東西3mの調査区である。調査では1.2m掘り下げたが地山の確認にはいたらなかった。遺構としては落ち込みを確認しているが、唐津系のすり鉢（2層）瓦（4層）須恵器（5層）、青白磁の皿（5層）が出土している。なお、上面は住宅に伴う側溝の搅乱を受けている。

#### 第2調査区

礎石と考えられる石の東側に南北1.6m、東西90cmの調査区を設定した。石は95cm×80cmであるが、石の東側は割られている。調査では43cm掘り下げて中止した。地山の確認はしていない。石の回りは産んでいるが、石を割るときのものと考えられる。しかし、石は大きく比較的原位置を保っている可能性がある。今後の調査で明らかにしたい。遺物としては瓦片が出土している。

#### 第3調査区

南北3m、東西5mの調査区である。1m掘り下げ、地山を確認した。地山面は西側に向けて緩やかに傾斜し、調査区西側でさらに傾斜していく。西側では地山上面に黒褐色土が堆積しており旧表土と考えられる。

#### 第4調査区

第3調査区東側に南北3m、東西10mの調査区を設定し、段状遺構を確認した。段差は1.4m、標高は11.24mで、さらに南北側に延びている。段部分には褐灰色疊混じり土（5層）が覆うように堆積している。層中からは瓦片・鎌運弁の青磁が出土している。このほかの遺物としては須恵器（4層）、唐津（3層）、伊万里（3層）が出土し、また、地山上面からは銅製品も出土している。なお、調査では5層を残し、一部立ち割るだけで段状遺構を確認している。

#### 第5調査区

南北3m、東西5mの調査区である。20cm掘り下げ、地山を確認した。遺構の確認にはいたらなかった。

#### 第6調査区

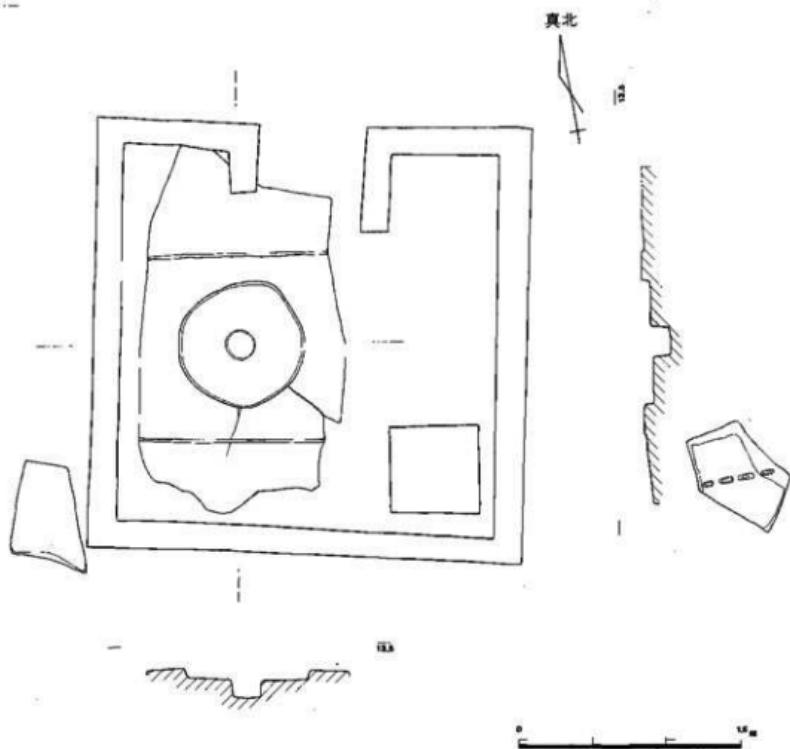
第4調査区南側2mの位置に南北2m、東西2mの調査区を設定し、段状遺構の確認を行った。  
段差は76cm、下場の標高は11.01mである。

#### 第7調査区

第6調査区の東側に南北2m、東西3.5mの調査区を設定した。36cm掘り下げ地山を確認した。

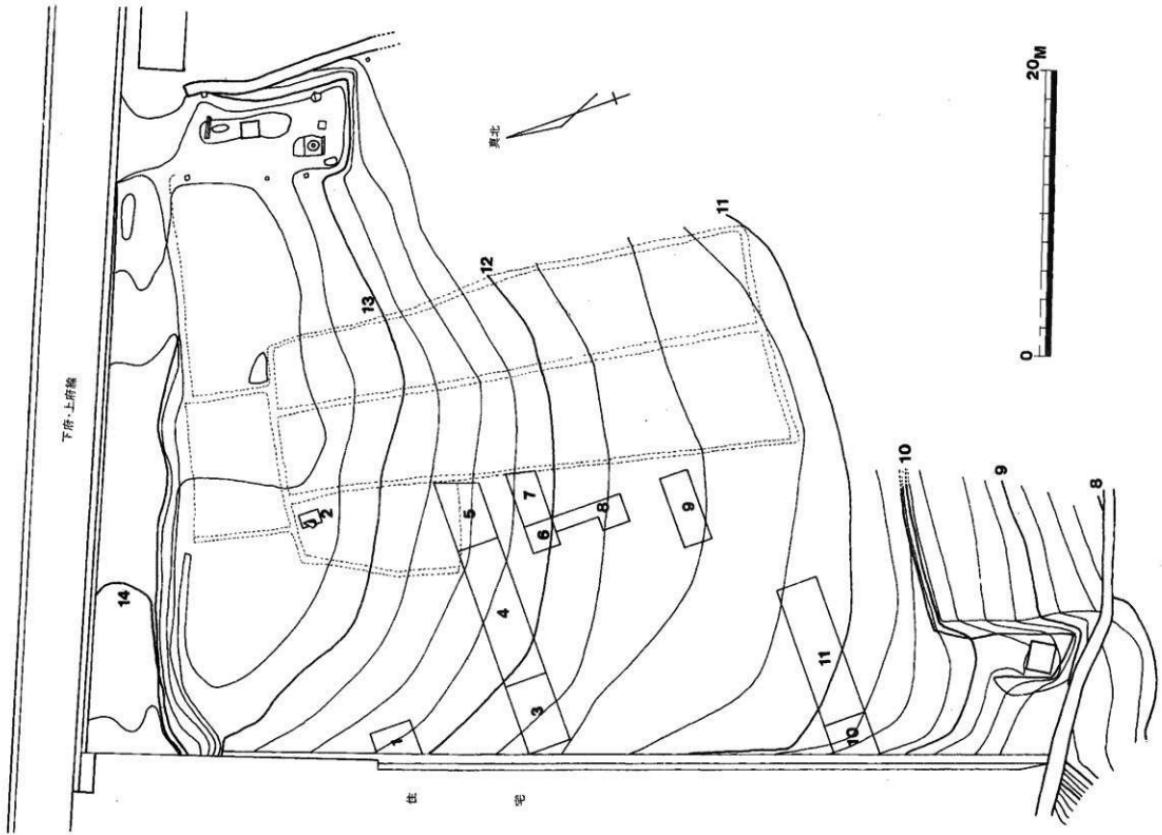
#### 第8調査区

第6調査区の南側に設定した調査区である。当初、第6調査区から3mの位置に南北2m、東西2mで設定したが段状遺構が確認できなかったため、南北3m、東西1m拡張して南側に緩やかに

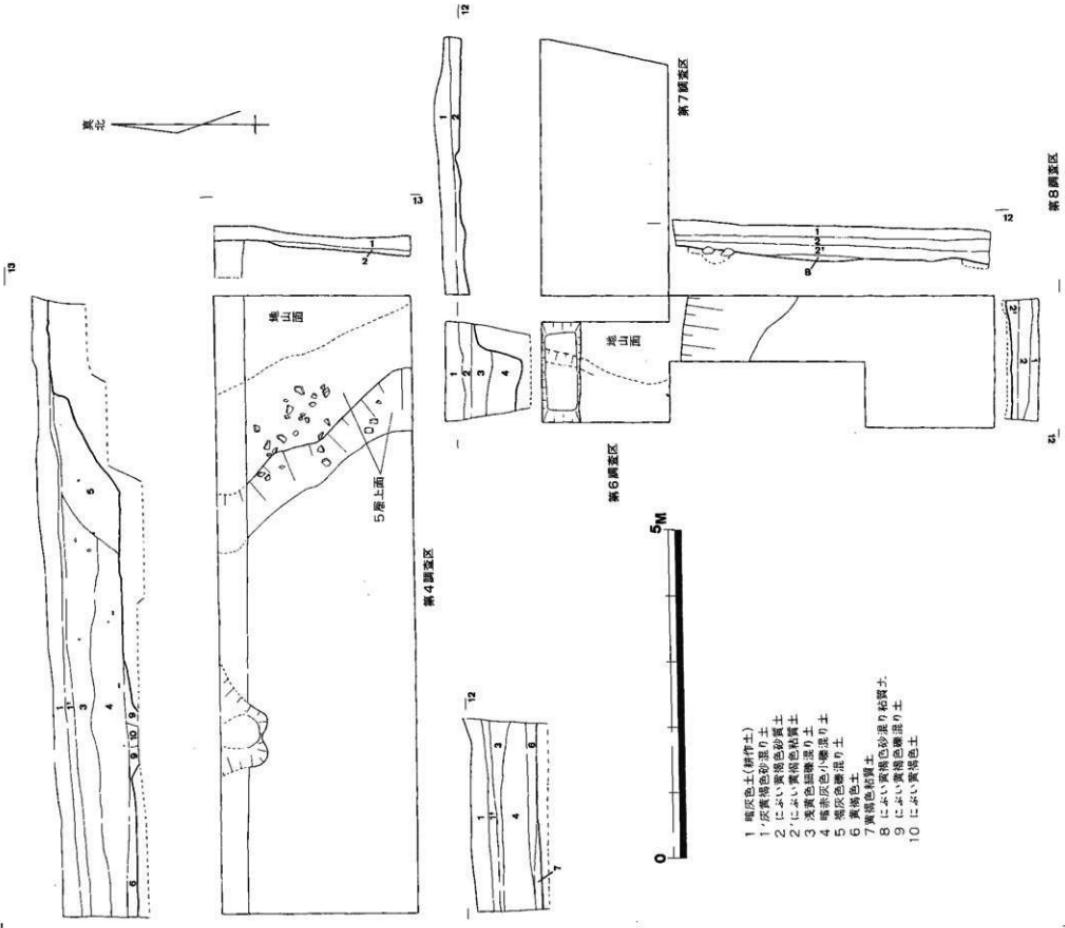


第3図 塔心礎実測図

第4図 下南慶寺跡調査位置図



第5図 段状地盤実測図



傾斜する面を確認した。段差は27cm、下場の標高11.38mである。しかし、後述する小鍛冶跡に関する記述して削平された可能性もあり、段状遺構の南側縁にあたるものか否かについては、今後の調査で明らかとしたい。

#### 第9調査区

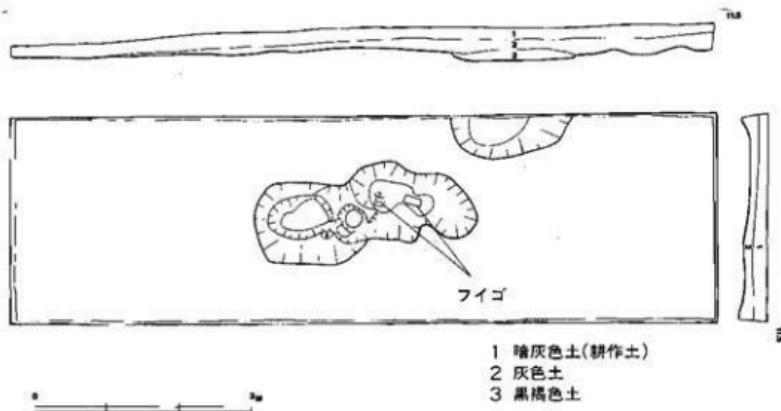
当初、段上遺構の確認のため第6調査区の南側10mの位置に南北2m、東西5mの調査区を設定したが、調査区南西側からピット列を確認した。ピットの埋土からは唐津の碗が出土しているほか灰・炭・焼土が確認されている。後述する小鍛冶跡に伴うものと考えられる。

#### 第10調査区

南北3m、東西3mの調査区を設定した。調査区西側の傾斜面から小鍛冶跡に伴うと考えられるピット状の遺構とその周辺から遺物を確認している。遺物は唐津の皿・碗、土師質土器、外耳土器、石製鍋が出土している。

#### 第11調査区

微高地南側の平坦面に南北3m、東西10mの調査区を設定し、調査区中央から東西3.1m、南北1.15mの不整形な炉跡を有する小鍛冶跡を確認した。炉跡の東側にはフイゴが残され、炉跡内からは灰・炭・焼土が確認された。なお、炉跡上面から伊万里の小瓶が出土している。



第6図 小鍛冶跡(炉跡)実測図

## IV 出土遺物について

今回の調査で得られた遺物はコンテナで7箱である。その大半は瓦類であり、このほかは須恵器陶磁器、土師質土器、外耳土器、石製鍋、砥石、銅製品があるが量的には多いものはなかった。以下、主な遺物について述べることにしたい。

### 1. 瓦類

出土した瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・半瓦である。このうち軒丸瓦は2点、軒平瓦は1点であった。

軒丸瓦 中房が高くなる単弁12葉蓮華文軒丸瓦（第4調査区5層出土）と細片ではあるが単弁蓮華文と凸銀唐文の構成からなる「天王平廃寺系」軒丸瓦が出土している。

軒平瓦 土出した軒平瓦の瓦当面は素文としケズリがなされ、凹面には布目痕が残る。

丸瓦 下府廃寺跡では行基式と玉縁式がみられるが、今回の調査では明らかな行基式をみるとすることはできなかった。

半瓦 平瓦の叩きでは、1. 平行叩き 2. 格子叩き 3. 繩叩き 4. 未調整があり、量的には繩叩きが多くみられる。なお、格子は肥大したものはみられない。

### 2. 土器類

出土した土器類は細片のうえ量的にも少ないものであった。しかし、前章で触れたように遺構内及びそれに伴う状態で遺物が出土している。

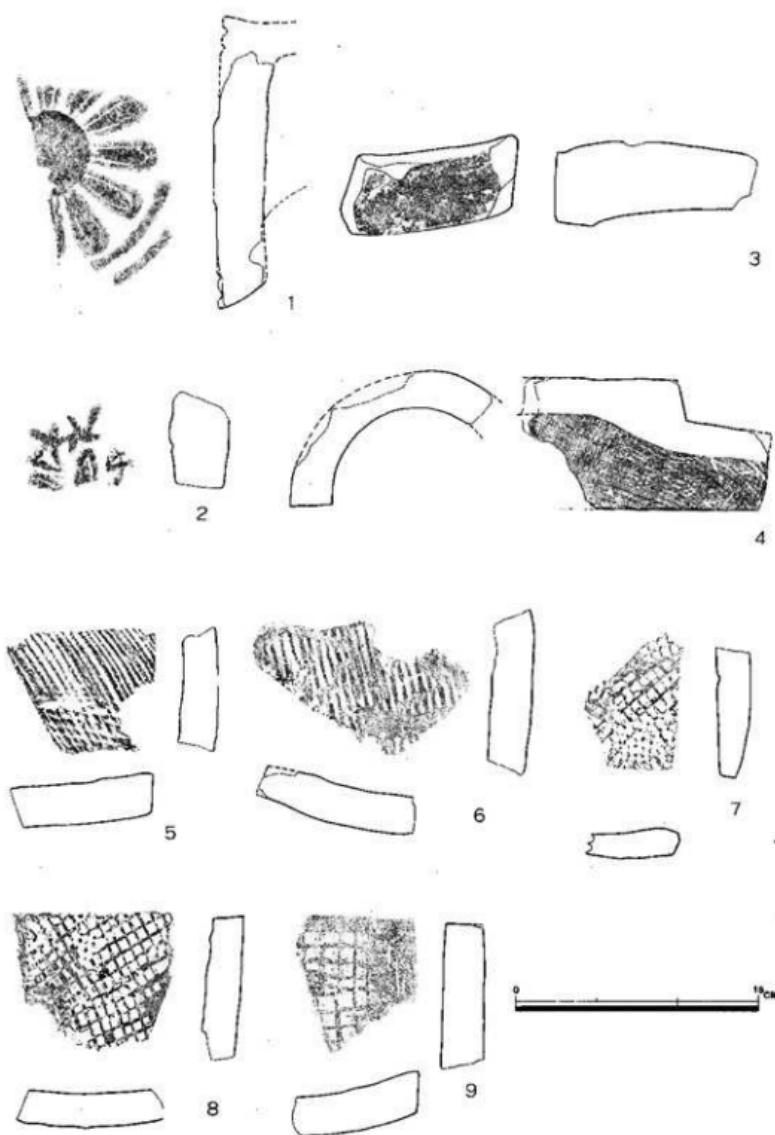
須恵器 第4調査区の4層から輪状つまみを有する蓋、高台の付く壺などが出土している。下府廃寺跡に伴うものと考えられる。

輸入陶磁器 第4調査区の5層から瓦片とともに錦蓮弁の青磁が出土し、また第1調査区の5層から青白磁の皿が出土している。ともに鎌倉時代の所産である。

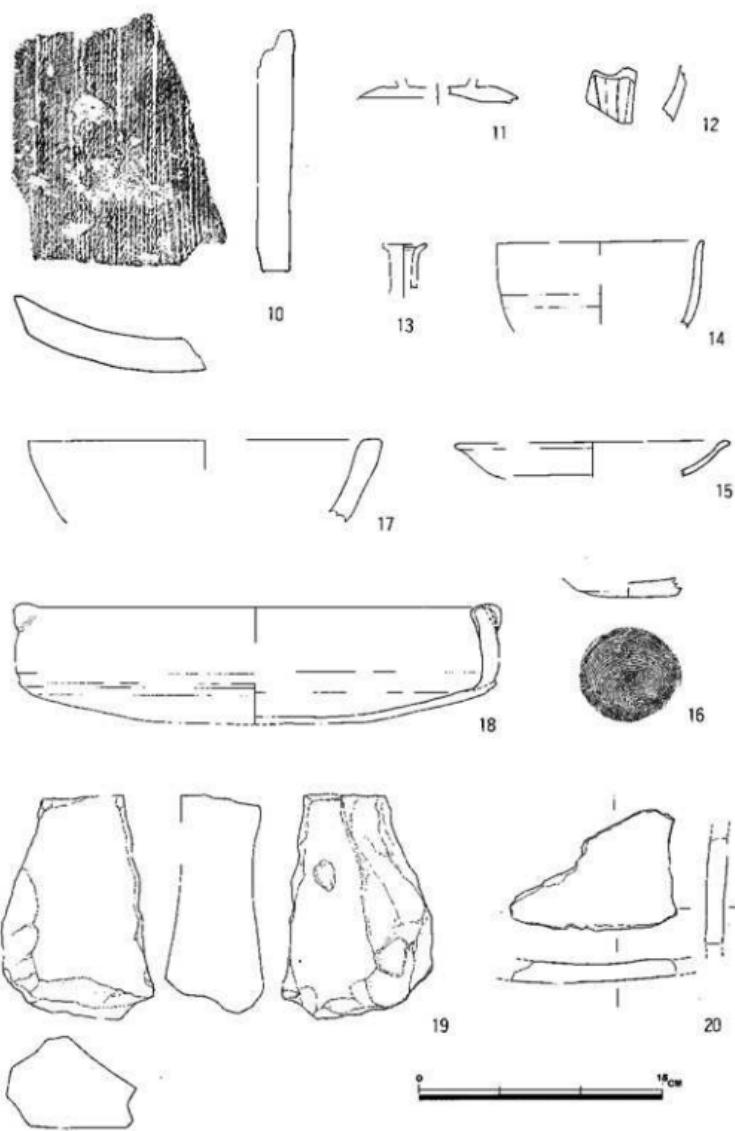
陶磁器 陶磁器として唐津と伊万里がみられる。小銀冶跡に関連した遺構と伴に出土している。時期としては16世紀後半から17世紀前半の所産である。

土師質土器 第10調査区で唐津とともに出土している。

このほか、第10調査区から外耳土器と石製鍋が出土している。これらはともに唐津とともに出土しているが、類例が少なく今後に期待したい。



第7図 遺物実測図(1)



第8図 遺物実測図(2)

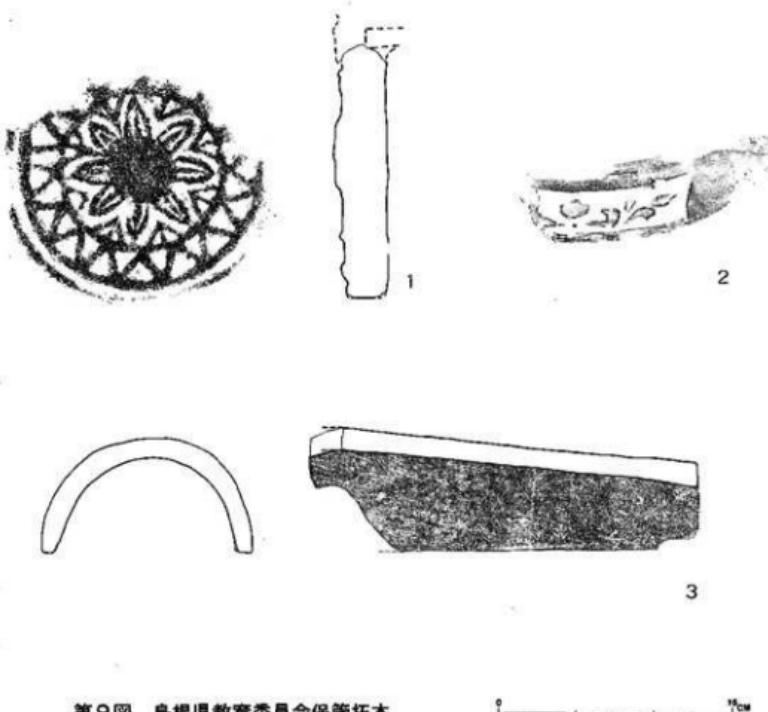
## 遺物観察表

番号	出土位置	種別	備考
第7図 1	第4調査区 5層	軒丸瓦	復元径 18.2 cm。内径 15.7 cm。中房は高くなり、径は 5.5 cm。蓮子は不明。
2	第6調査区	軒丸瓦	范の彫りは深いが、焼成は不良で弁が摩滅している。裏面はナデ。
3	第4調査区 3~4層	軒平瓦	瓦当を素文とし、ケズリを施す。側縁及び凸面もケズリを施し、凹面は布目痕が残す。
4	第4調査区 5層	丸瓦	凸面は側縁に平行な繩叩きを施し、さらにナデしている。凹面は布目痕が残る。
5	第2調査区	平瓦	凹凸面とも未調整であり、強く糸切痕が残る。
6	第4調査区 5層	平瓦	凸面は平行叩きを施し、凹面はナデを施す。
7	第4調査区 4層	平瓦	凸面は格子叩きを施し、凹面は布目痕を残す。焼成は良好である。
8	第4調査区 4層	平瓦	凸面は格子叩きを施し、凹面は丁寧なケズリを施している。
9	第4調査区 3~4層	平瓦	凸面は格子叩きを施し、凹面はナデを施す。
第8図 10	第4調査区	平瓦	凸面は側縁に平行な繩叩きを施し、凹面は布目痕を残すと共に、わずかに糸切痕を残す。
11	第4調査区 4層	須恵器蓋	輪状つまみを有し、天井部の切離しはヘラ切りによる。内面はナデを施す。
12	第4調査区 5層上面	青磁碗	体部の破片である。外面に銀蓮弁文を施す。
13	第11調査区 炉跡上面	伊万里小瓶	小瓶の頸部から口縁にかけての破片である。
14	第9調査区 ピット	唐津碗	体部から口縁にかけての破片である。体部中央から直立する。
15	第10調査区 ピット	唐津皿	体部は口縁に向って内湾した後、ゆるやかに外反する。
16	第10調査区 2層	土師質土器	回転糸切り痕を残す底部片である。外面ヨコナデ、内面ナデが施されている。
17	第10調査区 2層	石製鍋	口縁を磨いて平滑にしているものの、内外面は荒く削られている。
18	第10調査区 2層	外耳土器	底部はゆるやかに弛み、体部は内側へ傾く、外耳はやや張り出し、穿孔は刺突状となる。
19	第11調査区 2層	砥石	砥石として2面を使用する。
20	第4調査区 4層下面	銅製品	わずかに弧を描く板状の銅製品である。重さ 314 g。

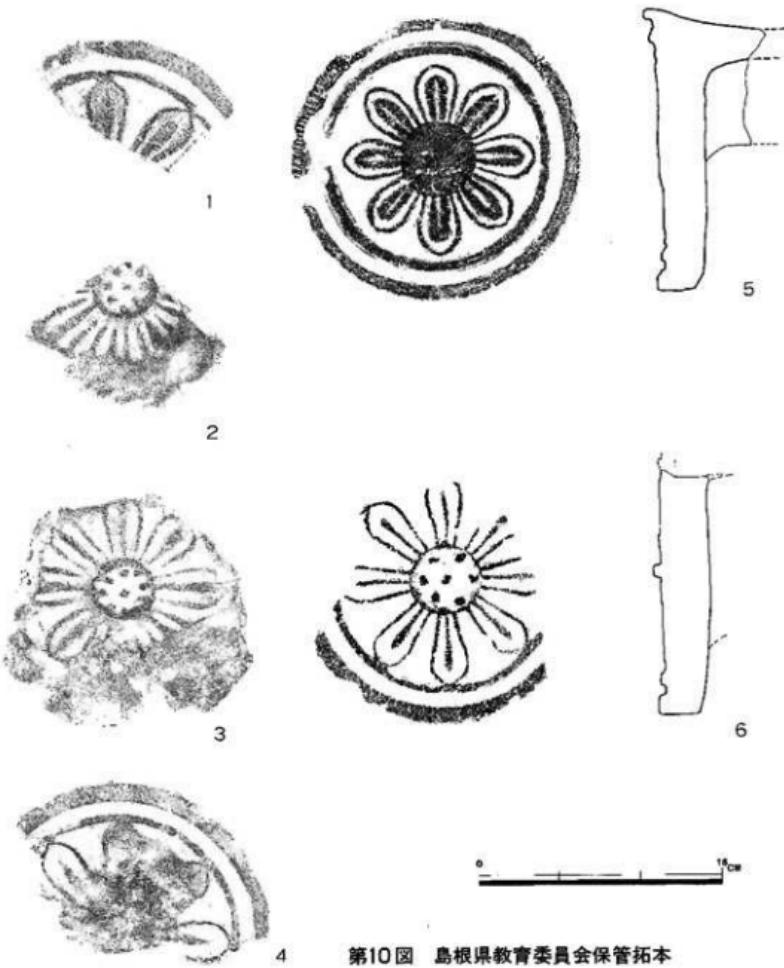
## V まとめ

下府庵寺跡の調査は寺域の確認と遺構の遺存状況の確認を目的とし、今回塔跡の真西側を中心調査を実施したが、寺域の確認にはいたらなかった。しかし、段状遺構の確認や地形測量の成果から新たな知見も得ることができた。以下、整理して述べておきたい。

(1) 塔跡については心礎及び2個の礎石が残されていることはよく知られているが、今回これらの位置関係を明らかにし、ほぼ原位置を保っていることを確認した。また、心礎の南西に位置する礎石は塔内側、南東の礎石は塔外側の礎石と考えられ、心礎を中心に正方形になるように塔を復元すると約6~7m四方となり、心礎の南北側に付けられた削り出しの段にはほぼ平行する。さらにその



第9図 島根県教育委員会保管拓本



第10図 島根県教育委員会保管拓本

ラインを西側に延長すれば第2調査区の礎石にあたることになる。したがって、あくまで推定であるが、主軸を真北よりさらに9.5度前後東側にとる法起寺式の伽藍を想定することもできそうである。今後の調査を待ちたい。

(2) 段状遺構は面的確認が不十分であり、遺構の性格は明らかではないが、第8調査区で確認した傾斜面が後世の小鏡治跡に伴って削平された面か、あるいは段状遺構に統いて壇状の遺構（第4・6調査区の段状遺構が西縁、第8調査区が南縁）となるのかが問題となり、今後の調査を待たなければならない。なお、段状遺構の時期の上限は第4調査区で段の上より廃棄されたとみられる5層中

から瓦片とともに青磁が出土しており鎌倉時代とすることができる。

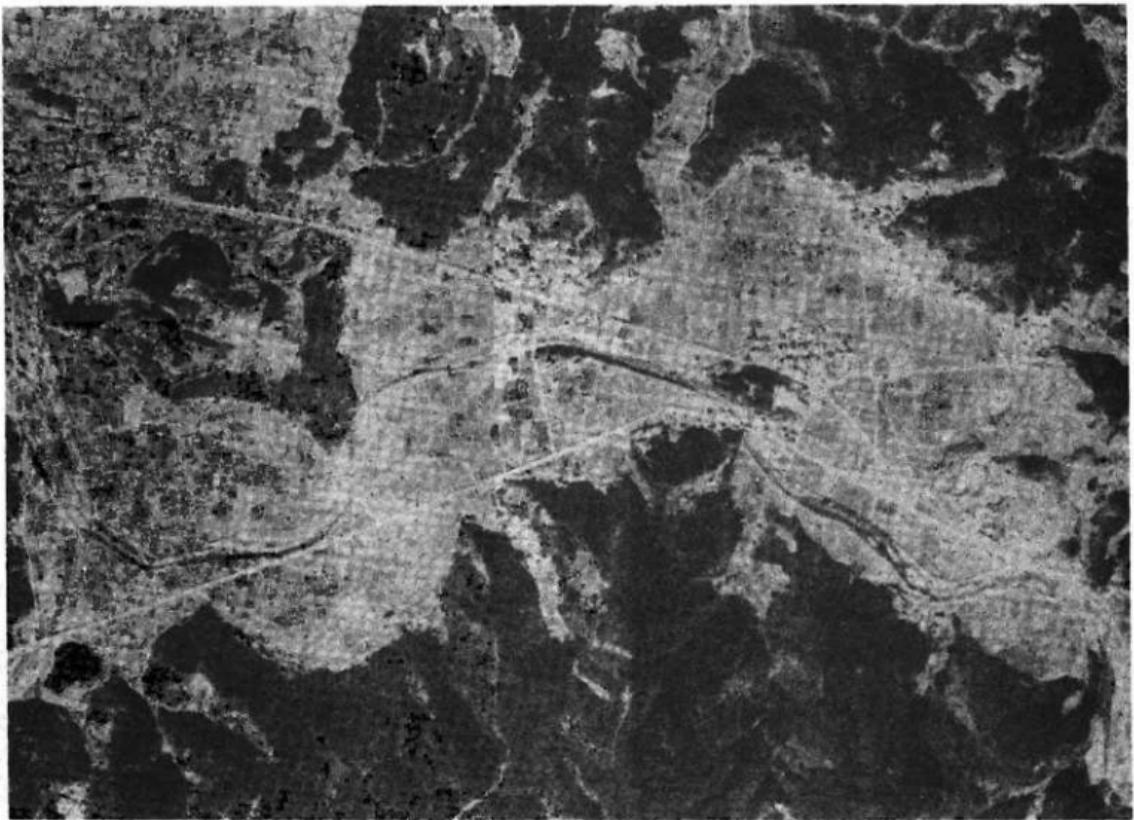
(3) 小鐵冶跡は第11調査区を中心とし、第9調査区にも広がるものである。地山標高は第11調査区で10.9m、第9調査区で11.2mである。地形測量ではこの周辺部分が平坦となっており削平した可能性もある。時期は出土遺物から近世前半と考えられる。

(4) 磐石は塔跡を除けば第2調査区のものと微高地南西隅のお堂に祭られているもののみである。地元の方々の話によれば現在宅地の下に大きな石が見られたとのことであり、また、安国寺にも石を運んだとのことである。

(5) 下府廃寺跡採集遺物については整理が行われておらず、また、遺物も散逸している。島根県教育委員会に保管されている下府廃寺塔跡の指定台帳に軒瓦の拓本が収められていたことから今回資料として収めることにした。採集日はすべて昭和11年11月16日となっている。なお、遺物が確認できたもの及び出土の明らかな丸瓦を加えて図面を付けた。また、軒平瓦については石見瓦と考えられる。

# 図 版





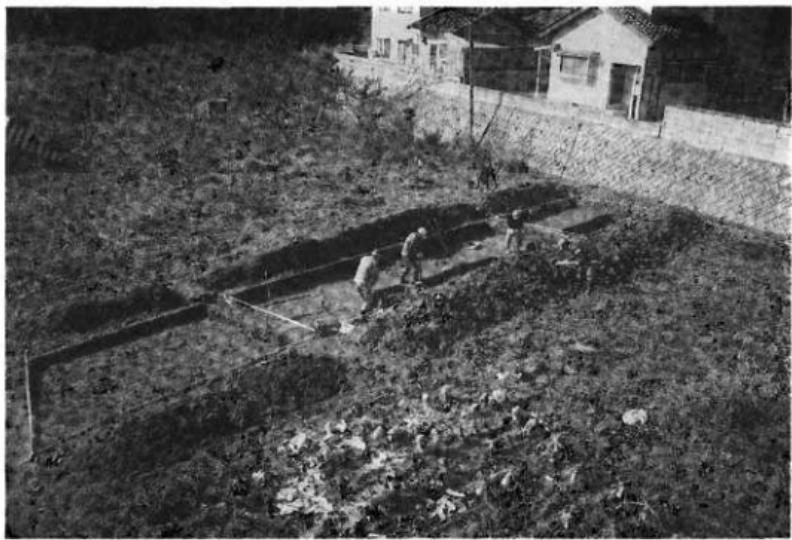
下府廃寺跡周辺航空写真（国土地理院・1:25,000・昭和22年）



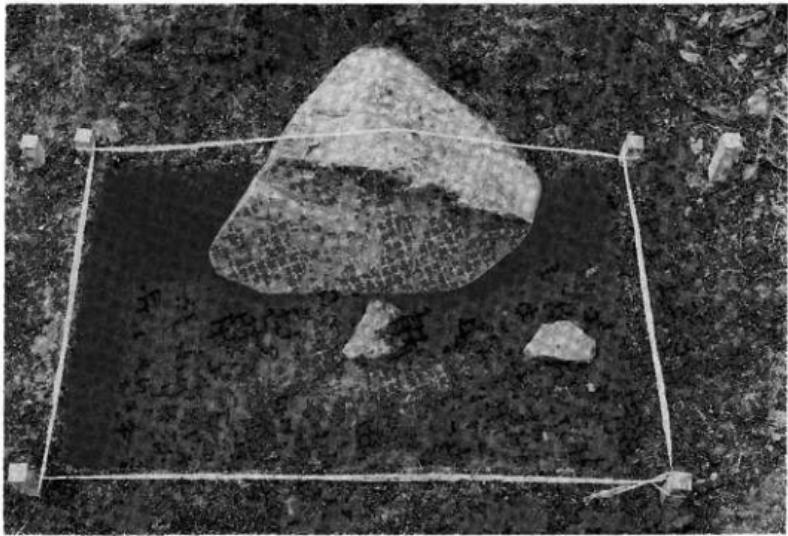
下府廃寺跡遠影 (西から望む)



塔跡近影 (北から望む)



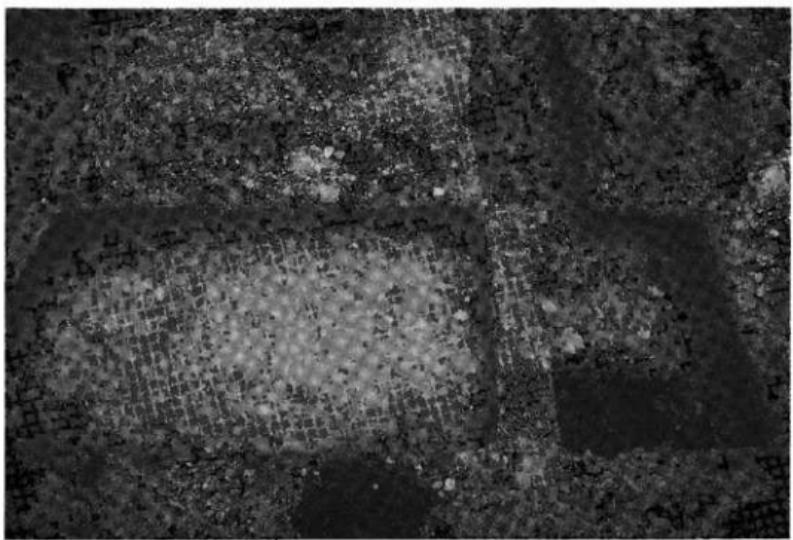
作業風影（第3・4・5調査区）



第2調査区（東から望む）



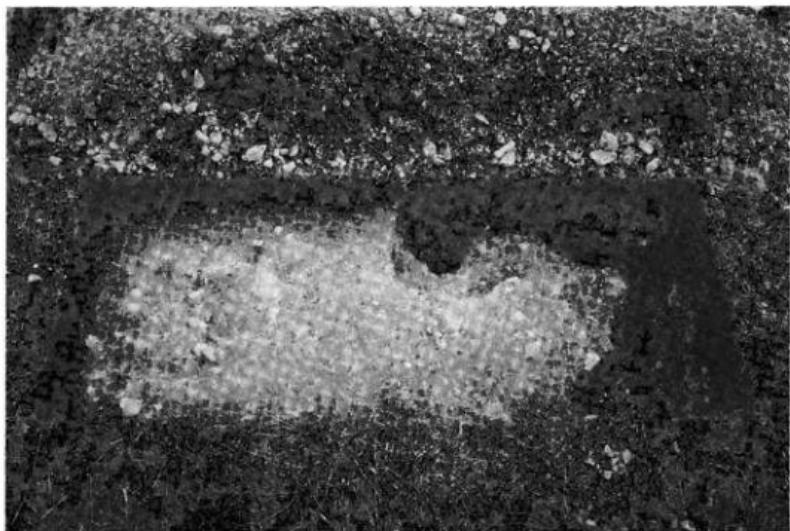
段状遺構（第4調査区・西から望む）



段状遺構（第6・7・8調査区・北から望む）



小鍛冶跡（伊那・第11調査区）



小鍛冶跡（第9調査区・北から望む）

